
妹は誰にも渡さん！

らむそじん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妹は誰にも渡さん！

【Nコード】

N 2 7 3 2 W

【作者名】

らむそじん

【あらすじ】

妹（沙織）と相思相愛であることを信じて疑わない変人兄さんの迷走ハイテンションラブ？コメディ。
迷走しかしません。

ブログ 妹を紹介します

俺には妹がいる。名を沙織という。容姿端麗、頭脳明晰、温厚質実、博学多才ついでに運動神経抜群の選ばれし人間、などとは縁もゆかりもない、それが沙織の特徴である。

端的にいうと、特に特徴といえるようなところがないことが特徴の、普通の妹ということだ。

輝かしい舞台の上で踊ったり、大勢の男を虜にしたり、そんな一握りの華やかな人生を送ったりするような、まるでアニメのキャラクターのような人物では決してない。

普通の妹だ。

しかし沙織は、俺にとっては、最高の妹である。

第一話 妹が俺を部屋に呼び出して相談があるっていうので……

その日、俺は沙織の部屋に踏み入った。数えること、二千五百七十回目の入室である。ほとんど毎日入っている訳だが、その日は少し事情が違った。

勉強机の上にいつもずっしりと構えているカエルのぬいぐるみのプー太郎くんが、あろうことかベッドの上に、四肢をおっぴろげにして寝転がっていたのだ。

由々しき自体であつた。

俺が知る限り、カエルのぬいぐるみのプー太郎くんが机の上から移動したのは、俺が沙織の部屋に入った七十回目と二百二十回目と四百七十四回目と八百七十六回目と千二百四十回目の計五回のみであり、今回の入室回数二千五百七十回目から最後にプー太郎くんが移動した千二百四十回目を差し引いた千三百三十回の間は、まるで不動明王のごとく机の上に恭しく鎮座しており、それは平均して一日に一回沙織の部屋に足を踏み入れている俺の計算上、今日まで約三年半の間、沙織が寂しい思いをしていないという確固たる物的事実を表しているに他ならないのだ。

平たく言くと、プー太郎くんをベッドに連れ込んだ今現在の沙織の心的状態が、正常ではないということだ。

沙織は現在十四歳で、ついでに俺は十七歳である。

沙織が、例のプー太郎くんを最後に布団の中で抱きしめながら眠ったのは、十歳から十一歳の間の小学五年生のことであり、俺はようやく一人で眠ることが出来るようになったのだと、心から安心すると共に沙織の成長に少し切なさを感じてみたりしていた訳だが、どういう訳か、なぜ今頃になって噂のプー太郎くんが再度、ベッド

の上に躍り出てきたのか、俺には瞬時には判断できなかった。

しかし、沙織の心の安寧を揺るがす何かが、存在していることだけは、推し量ることが出来た。

「そこに座つてよ、お兄ちゃん」

沙織は、小さなちゃぶ台の前に置かれている座布団を指差して、俺にそう促した。

俺は言われた通りに、座布団の上にあぐらをかいて座った。

「えつとね、さっきも言ったけど、相談があるんだ」

「沙織。それは、ベッドの上に転がっているプー太郎くんと何か関係があるのか？」

「え？ ああ、プー太郎くんはもう捨てようと思って、そこに置いてただけ」

「捨てんのかよっ……！」

「……え？ なに、ダメなの？」

「いや、大丈夫だ。関係なかったのか、なんだ、そうか。抱いて寝てた訳じゃないんだな……」

「ええー！？ なんで今更、ぬいぐるみ抱いて寝るのさ。それはもうとっくに卒業したよ」

「だよなー。はは、そうだよなー。あんなの抱いて寝たら、職歴無くなっちまいそудだよなー。はは」

どうやら、プー太郎くんは関係なかったようだ。ま、分かりきつ

ていたことだが。

「でねお兄ちゃん、相談っていうのはね……」

言い出しにくそうに、身体をもじもじさせる沙織。今日は髪が少しだけ、荒い。いつもは、ロングの黒髪が艶やかに床にまでこぼれ落ちて、それを意図せず、尻に敷いて床に座っているのに、今日の沙織の髪は床にまで届かず、まるで風呂上りにドライヤーで乾かすのを忘れてしまったかのように、くるくると荒くカールを巻いていた。

これは恐らく、髪の手入れを怠るほど緊迫しているという、危険信号であるとみてもよさそうだ。沙織は非常に危険な状態であるのだ。

兄である俺にはそれがすぐに分かった。

「沙織、その相談っていうのは、髪を乾かす暇もないくらい危ない相談なのか？」

「え、髪？ ああ昨日、髪切ったんだよ。ついでに軽くパーマあててさ」

「切ったのかよっ！……！」

「……え？ なに、ダメだったの？」

「いや、大丈夫だ。俺の見間違いだ。心の眼鏡が曇っていたようだ。うん、似合ってる。とてもキュートだと思うぞ。グッジョブ、床屋！」

「床屋は、ちょっと違うかもだけど。似合ってるんだ、嬉しい。ありがとうお兄ちゃん！」

頬を少し赤らめ、沙織が笑みを浮かべる。その姿をみて俺は安堵した。いつもの沙織がそこにいた。

沙織は少し間を置いて、もう一度繰り返した。

「相談があるんだ、お兄ちゃん」

「なんだ、沙織。悩んでいることがあるのなら、いつてごらんよ」

「男の人って、誕生日プレゼントにどんなものが欲しいのかな？」

「誕生日プレゼント？」

「そう、誕生日プレゼント。男の人が喜びそうなもの」

「それは誰か男にプレゼントを贈るということが、沙織？」

「うん、そうだよ」

誕生日プレゼント。まさか、沙織に限って、俺以外の別の男にプレゼント？ そんなまさか。三歳の頃から一緒の布団で寝て、四歳から九歳まで一緒にお風呂に入って、中学に上がってからは毎日のように勉強を教えてあげているこの兄を差し置いて、別の男にプレゼント？ そんなバカな。

そういえば、俺の誕生日が三カ月後に控えているじゃないか。

そうだ、俺の誕生日に贈るプレゼントだ。何を贈ろうか悩んでいるんだ。そんなの何だっていいのに、沙織がくれるものなら何だっていいのに。

いやいや、ちょっと待て。八年前から毎年欠かさず俺に誕生日プ

プレゼントを贈り続けてきた沙織が、今年に限って俺の好きそうな誕生日プレゼントを俺本人に聞いてくるだろうか？ 今更？ いや、それはちよつと考えづらい。そもそも、三カ月後ってまだ先じゃないか。じゃあ、やっぱり他の男へのプレゼントだということのか？

いやいやいや、しかし、俺以外の男にプレゼントだなんて、それこそありえないだろう。沙織は俺以外の男を男として認識していないぐらい俺一筋のスーパーブラザーコンプレックスなんだぞ。そんな沙織が、俺とは別の男に誕生日プレゼントを贈るだ？ そんなクレイジーなことするはずがないだろう。きっと、これには裏があるんだ。

もしかして男趣味の、あるいは限りなく男に近い存在の女の友達にプレゼントを贈るつもりじゃないだろうか？

そうだ、それなら不思議ではない。何もおかしいことはない。普通の女同士の友情じゃないか。女同士なら、プレゼントを贈ろうがチューをしようがまったく問題はない。よしこれで行こう。

俺は結論に達した。

「沙織、お前その友達と仲いいのか？」

「えーと、友達ってほど仲がいいって訳じゃないんだけど……。これから、お近づきになりたいなあとか思ってた、その人のお誕生日会を開くことになったんだけど、何をプレゼントしようかなって悩んで……」

髪をいじりながら、沙織が答える。歯切れが悪く、照れ隠しをしながらしゃべっているみたいだ。

「そうか、まだそこまで進展はしていないのか。よし、任せろ沙織！ お兄ちゃんが全力で二人の仲を取り持ってやろう！」
「ほんとに！？ ありがとうお兄ちゃん！ 私、頑張る！」

かくして俺は、沙織のお友達を増やすべく立ち上がった。女友達は多ければ多いほど、沙織もきつと喜ぶだろう。女友達で周りを堅めまくって、悪しき男が入ってくる隙を与えない。それが俺の目的だ。

沙織の周りに男はいらない。

第二話 妹とデートすることになったので……

「ほらお兄ちゃん、あっち見てよ！」

沙織が、路上に出来た人ごみを指差していった。人ごみの中心には赤いピエロのような格好をした人間が立っていて、大勢の観客が周囲を取り巻いていた。どうやら、路上パフォーマンスをやっているみたいだ。

赤いピエロは、手に持っている三つのバトンの先端に火をつけ、それを放り投げてたくみに操り始めた。

「うわあ、すごい！　すごい！」

沙織が感嘆の声を上げる。

「お兄ちゃん見てよ、あそこほら！　すごいよ、あのパンダのおじさん！」

「パンダじゃないぞ、ピエロだ、沙織」

「え？　だって白いよ？」

「半分は赤いだろ」

「そっか、じゃあピエロか」

「そうだピエロだ。百人見たらきつと九十九人がピエロと答えるぞ。パンダ成分は一パーセントぐらいだ」

そんないつも通りの会話をしながら、俺たち兄妹は都会の路上を歩いているのだった。

本日、四月二十七日、日曜日。曇り空。俺たちは、誕生日プレゼントを買いに行くため、とあるショッピングモールへと向かった。

つまりデートをしていた。

昨日、沙織から相談を受けた後、善は急げということで、俺は沙織と一緒にプレゼントを買いに行くことを提案した。沙織ももちろんそれを承諾した。

今思えば、昨日の相談は俺とデートするために仕組んだ沙織の作戦だったのかも知れない。いや、多分そうだろう。俺はそう思い始めている。

だって、今日の沙織はいつもよりいつそうお洒落をしているのだから。クリーム色のプリーツスカートを靡かせ、日頃はハイソックスなのに、今日はなぜかニーソックスを履いている。そして、間から張りのある太ももが顔を覗かせていた。殺人的であった。これはもう、どう考えても『お兄ちゃんを太ももでイチコロ大作戦』が決定されていると思えんのだ。

先ほどから、俺の視線はずっと沙織の下半身に釘付けである。

恐るべし、我が妹。

「お兄ちゃん、ショッピングモール着いたよ。さっきから、なにしてるの？ 俯いて地面ばっか見て」

「え？ ああ、着いたか。そうか。いやなに、えーと……ろ、路上になにか危ないものが落ちてないか気になってな」

「危ないもの？」

「そうだ危ないものだ。沙織、知ってるか？ この前ニュースでやっていたんだが、道端に六歳ぐらいの女の子が落ちていたらしいんだ。大事件だ」

「へえー」

「保護されたそうだ」

「へえー、そうなんだ」

「行くあてがなかったんだろうな、世知辛い世の中になったもんだ」
「両親がいないと大変だね」

そこまで話して、俺たちの会話は途絶えた。首を傾げながらも、黙々と歩く沙織。

俺はそっと、胸を撫で下ろした。どうやら、助かったようだ。なんとか誤魔化せたみたいだ。危うく、沙織の太もを全力で見えたことが、バレてしまうところであつた。危なかった、紙一重である。

とはいえ、別に太もを見てましたと告白しても、俺にぞっこん二千パーセントの沙織は笑って許してくれるだろうが。むしろ、わざと見せようとしている節すらつかがえる訳だし。

けれども、俺はあくまで沙織の兄なのだ。お兄ちゃんなのだ。お兄ちゃんとは、いつの時代も妹の前ではクールかつ知的に、万能に振舞わなければいけないのだ。絶対的存在を貫かなければならないのだ。そんなお兄ちゃんである俺がまさか、沙織の太も見るのに必至でしたなんて自白したら、沙織の中でパーフェクトであり続け

ている俺のイメージにひびが入ってしまうではないか。

もしや、沙織はそれを全て分かっていて、俺を試しているのだろうか？ 俺が、煩惱に負けるような小さな器なのか否かを、煩惱すら超越した次元で沙織を愛しているのか否かを、試しているのだろうか？ 多分そうだろう、そうに違いない。ひとえにこれは愛の試練なのだ。長く険しい道を登りきったとき、俺と沙織の愛は本物だったのだと、証明されることになる。

ようやく沙織の考えが読めたぞ。沙織は今日のデートを通して、俺と愛の方程式を解こうとしているようだ。XとYが交差するとき、俺と沙織のラブエターナルが始まるのだ。間違いない。今まさに、沙織が仕組んだ『お兄ちゃんとXYラブエターナル作戦』が現在進行形で決行中なのだ。そう来たか、沙織よ。普通の頭脳の持ち主ながら、なんて恐ろしい妹。

こうなったら、今日は一日中パーフェクトなお兄ちゃんを演じ続けるほかはない。見てろよ沙織、お前の理想通りのお兄ちゃんを俺は華麗に演じきってみせるからな。知的かつクールに、万端で絶対的な神お兄ちゃんを、お前に見せてやるからな。

俺の推察に、隙はなかった。

「ねえ、お兄ちゃん。どこ行くの？」

「三階だ。おもちゃ売り場に行こう」

俺たち二人は、せかせかとエスカレーターを歩いていた。

「男の人って、おもちゃをプレゼントされたら喜ぶんだ？」

「プラモデルをプレゼントされて喜ばない男はいないぞ」

男だろうと女だろうと、男趣味の女だろうと、限りなく男に近い存在の女だろうと、プラモデルを貰えば誰だって大喜び間違いなしである。

「でも、お兄ちゃん、そのプラモデルってやつ持ってないよね？」

「俺はビックリマンシル派だからな」

「そうなんだ、へえー。そういうの、私よく分かんないよ」

「着いたぞ、沙織」

俺たちは、三階のおもちゃ売り場に到着した。その一画に、プラモデルの箱が敷き詰められている棚があった。プラモデルコーナーである。

「なんか、いっぱいあるよ。どれにするの？」

やや困惑しながら、沙織が訊ねる。

「そうだな、とりあえず一番デカイのでいいんじゃないか。デカイやつが一番嬉しいだろ」

「んー、じゃあこれ？」

沙織が棚にある箱を一つ取り出して、見せてきた。箱に1 / 6 0と書かれている。

「こっちにもうひと回り大きいのがあるぞ」

俺は背伸びをして、棚の上のほうにある箱を新たに引き出した。今度は1 / 4 8と記載されていた。なんでも三十周年記念に発売されたものらしく、箱の大きさも結構なものであった。メガサイズと書いてある。

俺は値札に目を留めた。

「八千円もするなこれ……。沙織、大きいのは止めよう。小さい方がいろいろと気持ちが悪まって喜ぶと思うぞ。大きさをなんて関係ないだろ」

……。

沙織の返事がない。俺は周囲を見回した。

「あれ？ おい、沙織！ どこ行ったー？」

「お兄ちゃん、これとかどう？」

「うわっ！ なに持って来てんだ」

沙織が馬鹿でかい箱を担いで戻ってきた。沙織の身体の半分以上はあるかと思えるぐらいの、大きな箱である。

「見てよこれ、ほら！ 絶対一番大きいよ」

「待て待て待て！ 沙織、それはなんだ。等身大カブトガニかなにかか？」

「よく分かんないけど、ほら。真ん中のところにお兄ちゃんが持つてるその白いやつが乗ってるよ」

「煙突みたいなの付いてるぞ。ちょっと、いくらだよ、それ」

「えーと……二万九千円だって」

「戻してきなさい」

沙織は再び箱を担ぎ上げて、向こうの棚へと引き返していった。俺はプラモデルを舐めていたようだ。まさか、あんなにデカイものまであるとは思っても見なかった。

「手のひらサイズで、いいじゃないか」

俺は一人つぶやいた。

「なにやってんの？ こんなところで」

背後から肩を掴まれ、俺はとつさに振り返る。後ろに立っていたのは、俺のクラスメイトで幼馴染みの道式結奈^{みちしき ゆいな}であった。

「なによ、人の顔じつと見て」

「お前は今すぐ、この場から離れる。今すぐにだ！　今すぐにだ！」
「はあ？　私はここに買い物に来たんですけど」

目の前の女は右手に持っている白いビニール袋を突き出し、俺にそう主張してきた。中には、小ぶりの長方形の箱が三つほど納まっている。プラモデルの箱であった。

「そうか分かった。なら、俺が帰ることにするわ。じゃあな、さいなら」

俺は急いでその場から離れようとした。が、しかし――。

「あー！　結奈お姉ちゃん！」

「あら、沙織ちゃんも一緒だったの。お久しぶりー！」

いって、二人は熱い抱擁を交わした。

最悪な、巡り合わせであった。幼馴染みの道式結奈は、端的に説明すると、ガン細胞である。俺たちの家の近所に住んでいるこいつは、なにかと俺と沙織の間に割り込んできては二人の恋路を邪魔を

しようとしてくる、最悪な女である。ことあるごとに俺に拳を振るってくるような乱暴者であり、俺はこいつがすこぶる嫌いであった。

「髪型変えたんだ、沙織ちゃん、すっごく似合ってるわよ」

「えへへ、少しだけ短くしたんだ。ありがとっ、お姉ちゃん」

そんな俺の気持ちとは裏腹に、沙織はこの女をなぜか姉のように慕っていた。妹に取り入ってなにを企んでいるのか、どこまでも腹黒い女である。同じ女とはいえ、沙織の周りにこんなアバズレ女を置いておくことは憂慮すべき事態であり、俺はかねてからこいつの存在に危機感を持っていた。

俺にとっても沙織にとっても、この女との遭遇は、最悪なのである。

「二人して、どうしてこんなところにいるの？」

「お兄ちゃんと一緒に、プレゼント選びに来たの」

「プレゼント？ 誰の？」

「えーと……私と同じクラスの、男の子の……」

「あーもしかして、沙織ちゃん、彼氏が出来たんだ」

「んなわきゃねーだろ！ このアバズレ女がああ……！！」

俺の怒号がおもちゃ売り場に響き渡った。

「な、なんであんたが答えるのよ。うるさいわよ！ しかもアバズ

レじゃないし」

「お姉ちゃん、彼氏だなんて、そんな違うよ。まだ話したこともほとんどないんだし……」

沙織が頬を紅潮させて、小さくつぶやいた。その様子を見て、アバズレ女がニヤリと気持ち悪いくらいの笑みを浮かべた。

「ああ、そうなんだ。そういうことか。へえー。でも、プレゼントってなんでもちや売り場に来てんの？」

「男の人はみんなプラモデルが好きって、お兄ちゃんが教えてくれて」

「はああ！？ そんなわけないでしょ。むしろ少数派よ、プラモ貰って喜ぶ人なんて」

「そうなの？」

「そうに決まってるじゃない。だめよ、沙織ちゃん。こいつのアホな感性に頼っちゃ」

「ちよつと待てアバズレ！ プラモデルを貰って喜ばない奴はいないって、お前が俺に教えたんだろ」

「それは小学生の頃の話でしょ。私もお父さんにそう教えられたのよ。今は、マイナーだってことぐらい分かってるわよ。なに？ あんなそんな小さい時のこと信じてたの？ アホも大概にしないさいよ」

法律が許すのなら、俺は直ちに大きく振りかぶってこの女を殴り飛ばしているだろう。プラモデルは万人共通言語だとか、衣食住の次はプラモデルだとか、総理大臣はプラモデルだとか、俺にプラモデルのことを吹き込んできたのはこのアバズレ女である。それを、

今更、少数派だとかマイナーだとか教えられても信じられるわけがないだろう。俺の中でプラモデルは、ビックリマンシールと並んで二大エンターテイメントとなっているのだ。このアバズレ女め、人をどこまでも馬鹿にしやがって。

「さ、私も手伝ってあげるから、とりあえずおもちゃ売り場以外の場所に行きましょ、沙織ちゃん」

「ちよつと待てえ！ 女のお前に、男の気持ちができるのか！？」
「あんたより百倍分かと思うわよ」

そうして、俺たち兄妹とアバズレ女の三人は、五階建てのショッPINGモール内をうろつる彷徨い始めることとなった。が、一向にプレゼントは決まらず、結局、衣服や時計、書店などを一式巡り尽くしてしまい、一階の入り口付近へと流れ着いたのだった。

「うーん、ダメね。男の子へのプレゼントって意外と難しいわね」
「これだから、女は。どうしようもねえな」

「うっさいわね！ あんただって、さっきから黙って着いて来てるだけじゃないの。なにか知恵を出しなさいよ」

「だからプラモデルで」

「却下。そもそもあんた、プラモ作ったことないじゃん。シールばっか家のタンスに貼り付けて」

「それは小学生の話だな。今はちゃんとホルダーに閉まってある」

「沙織ちゃんが誕生日プレゼントを贈ろうとしている相手って、お金持ちなんだよね？」

俺を無視して話を進める、アバズレ。

「そうだよ、今度のパーティーもたくさん人を呼んで、盛大に祝うみたいだよ。それで、私や他の友達も参加出来ることになって」

「そうか、じゃあお金持ちの御曹司さんか。物で攻めるのは難しいわね。金銭的にも」

「物じゃないってことは……肩叩き券とか？」

沙織が首を傾げる。

「違う違う、敬老の日じゃないんだから。その彼の誕生日はいつなの？」

「来週の日曜日だよ」

「よし、じゃあ手作りのお菓子なんてのはいいんじゃない？」

「お菓子……か。でも私、料理とか全然したことないし」

「大丈夫よ、私が教えたげる。まだ一週間もあるんだから。手作りのプレゼントならきつと喜んでくれるわよ」

「ほんとに！？　じゃあ、やってみようかな……手作りのお菓子」

「よし！　そうと決まれば明日から特訓ね。材料買いに行きましょう」

二人は手を繋いで、一階にある食料品売り場へと歩き出した。

「俺の存在は、無に帰したのか……」

後ろの方で、一人取り残された俺がいた。

第三話 妹が帰ってしまったので……

俺が目覚めたときにはもう、最愛の妹の姿はなかった。辺りは薄暗く、やけに静かで、分厚い鉄の壁が四方八方を取り巻いていた。

『香織、どこだ？ どこへ行った香織！』

妹の名を、繰り返し叫んだ。しかし、返事はない。俺の声だけがただ闇雲に、その教室ほどの大きさの空間に響き渡った。閉じ込められたみたいだ。

どこに？

分からない。

多分、どこかに――。

突如、大きな轟音と共に目の前の壁が横に開き始めた。隙間から光が差し込んでくる。

『なんだ、どうしたっ！？』

壁の扉が開いた先――入り口には、目がくらむほどの日の光を背にして、ローブを羽織った人間が一人、立っていた。

低い声がした。

『ようこそ、異世界から召喚されし勇者よ。主の右腕こそ、魔王を

倒す唯一の鍵。どうか世界を、王妃を救ってくださいね』

それが全ての、始まりだった。

「なあ、アバズレ。この映画、出だしから糞つまんねえんだけど」
「しっ！ 静かにして。それと、アバズレじゃないから」

口元到人差し指をあて、隣に座っている女が俺を制した。視線はずっと、前方の巨大スクリーンを捉えたままである。

「アバズレ先生。これ何分あるんですか？」
「三時間半。あと、アバズレじゃないから」
「うええっ!？」

俺は背もたれに身をあずけ、膝元に置いてある容器の中からポツポツコーンをつまんで、自身の口に放り込んだ。

一体どうして、こうなった……。

時を遡ること、約三十分。

俺と沙織とアバズレ女の三人は、クッキー作りに必要な材料を買い揃え、帰宅するはずだった。いや、綿密に言えばアバズレ女だけ帰ってもらって、残りの時間を俺と沙織の二人で楽しく過ごす予定

であつた。

のだが……。

沙織がアバズレ女になにかを耳打ちした。俺を見ながらひそひそと。

そして、わけも分からぬまま突如、沙織が帰宅宣言をしたのだ。

「お兄ちゃん私、用事があること忘れてた。帰るね。じゃあねー」

いつて、沙織が駆け出す。

「は？　おい、ちよつ沙織！　待てよ！」

追いかけようと走り出した俺だったが、見事に転んだ。つるつと滑って、腹からぶつ倒れた。後ろの方で、アバズレ女が笑いを堪えているのが分かった。通りすがりの人にも注目された。

「おい……アバズレ……」

「え、なに？」

「きさまぁ！　沙織になにを吹き込んだ！！」

振り返り、俺はぶち切れた。

「なにも吹き込んでないわよ、失礼ね」

「嘘付けえ！ お前のせいで沙織が帰っちまったじゃねえか！」

「用事があるっていつてたじゃん」

「信じられるわけねえだろハゲえ！ さっきなにを耳打ちされた！」

「し、知らないしー」

「答えろ！ 全て答えろ！」

「別にー。あんたには関係ないしー」

明後日の方を向いて、飄々と俺の怒りをかわすアバズレ女。

「そうか分かった。それならそれで、もういい。俺は帰る。今すぐ帰る、そして寝る」

立ち上がって、歩き出そうとした。

「ちよつ、ちよつと待ちなさいよ」

「離せつ！ 汚い菌がうつる」

「さつき、沙織ちゃんのお秘密を聞いたのよ」

「なんだと、じゃあそれを早くいえ」

「内緒にしるっていわれたから、ダメ」

「くっ……俺には秘密にしてお前にだけ教えるだと。そんな理不尽が許されてたまるか！ とつと吐け、このハゲ！」

「んーでも、どうしよっかなー。私と沙織ちゃんだけの秘密だしー」

「お前に沙織と秘密を共有する権利などない！」

「じゃあ、仕方がないから教えてあげる。ただし、条件付きで」

それを聞いて、俺はゼロコンマ二秒でポケットから財布を取り出し、中から札を一枚引き抜いて、それをアバズレ女の目の前に差し出した。

「一万円でファイナルアンサー」

「いやいや、お金じゃないんだけど。てか動きはやっ」

「じゃあ、二万円で」

「人の話、聞なさいよ」

「じゃあなんだ。なにが望みだ、お前は」

すると、アバズレ女は一瞬躊躇したかに見えたが、すぐさま俺に向かって一言、こう告げた。

「見たい映画があるんだけど」

こうして、五階の映画館に行く羽目になった。

俺は膝から崩れ落ちた。

『なぜ、こんなことに……』

緑のない荒れ果てた大地、そしてそれを隔てる赤い溶岩の川だけ

が、眼前に広がっていた。香織が捕らえられていた城は跡形もなく消えている。

『どうしてこんなときに、動いてくれないんだ！』

俺の右腕は黙したままである。

『肝心なときに！ なぜ！？ なぜ、動かないんだ俺の右腕は！！』

右腕を岩に、何度も、何度も、叩きつけた。

この世界を救うには、右腕の開放が必要であつた。

『動け！ 動け！ 動け動け動け動け動け！！ お願いだ！ 動いてくれ、俺の右腕ええええええ！！』

「なあ、アバズレ」

「アバズレじゃないけど、なによ？」

「さっきから、俺のポップコーン食いすぎじゃね？」

「しっ！ 今、いい所だから。後にして」

「ふああ……俺、もう寝るわ。お休み」

「じゃあドリンクも貰うわよ」

それだけ聞いて、俺は座席に身を沈め、緩やかに眠りへと入って

いった——。

目が覚めたら、映画は終わっていた。

俺は空になったポップコーンとジューズの箱をゴミ箱に捨てて、アバズレ女が待っている場所へと引き返した。

「すつつつごい、よかったわよ。あんたなんで寝てたの？ 信じらない」

「ジューズまで全部飲みやがって。お前のその厚かましさ、俺には信じらんねえよ」

「出来ればコーラじゃなくてジンジャエールの方がよかったかな」

「お前のために買ったんじゃないやねえよ！」

「でね、最後のあのシーン、すつごい迫力があってね」

「話し逸らすな」

「実は右腕が魔王だったって知って、右腕を切り落として、マグマの中へ放り込むかどうかで葛藤するところ。『早く右腕を捨てるんだ！』って彼の友人が叫ぶシーンは感動ものよ」

「そうか」

「やっぱり期待通りの作品だったわね。右腕物語」
「そうか」

俺とアバズレ女はエスカレーターを下り始めた。

「どこ行くの？」

「帰るんだよ。その前に、沙織の秘密をはやく教えろ」

「えー。私、お腹減ったんだけど」

「あれだけ食ったじゃねえかポップコーン。家帰って食えよ。それより早く沙織の秘密を教えろ」

「映画寝てたじゃんあんた、だからダメー」

頭の上でバツマークを作るアバズレ。

「はああ！？ 舐めてんのか、寝てても千三百円かかってんだぞ！」

「ダメー、ご飯食べについて来なきゃ、教えてあげないー」

「ふおおおおお！！」

第四話 幼馴染みとデートする羽目になったので……

五分後。俺は真っ白に燃え尽きていた。
飲食コーナーのテーブル前で。

「ほら、たこ焼き買ってきたわよ。私はどんぶりも一緒に。ちよつと、水汲んで来てっていったじゃない。もう、男ってほんとに動かないんだから」

アバズレ女は、たこ焼きやら親子丼やらが入ったお盆をテーブルの上に残して、再び遠ざかっていった。

俺は今すぐ帰りたかった。ただちに、あの女から離れたかった。あの女はまるで疫病神である。しかし、俺はそれでも、胃の中が胃液でどろどろになるぐらいまで荒れてもなお、ここへやって来たのである。

ひとえに、沙織の秘密を知るためであつた。

「ほら、水も汲んできてあげたわよ。どうしたの？ 口を半開きにして、視点定まってないわよ？ 気分でも悪いの？」

「……」

「たこ焼き食べて、元気出しなさいよ」

「……」

「あんたって、ほんと変わってるわね。しかもいつも愛想悪いし。もう少し楽しくしなさいよ」

お前のせいである。楽しくないのはお前のせいである。そして、沙織がないからである。沙織がない世界なんて、口を半開きにして、遠くを眺めていれば十分である。俺はこんな奴と一緒に飯など食いたくはないのだ。

「次はね、洋服見に行こうと思うの。夏服そろそろ買いに行かなくっちゃいけないし」

「どうぞ、ご自由に」

「あんたも着いて来るんだからね」

「ふおおおおお!!」

「その変な嘆きかた、止めてよ。ちょっと気持ち悪いわよ」

「ふおおおおお!!」

「面白い話題、振りなさいよ。男なのに」

次に俺が立っていた場所は、四階の服屋であった。レディース服ばかりが並んでいて、実に退屈極まる場所である。

俺はもう抗うことを止めた。このアバズレ女には、なにを主張しても無駄であることがよく理解できた。俺と沙織の仲を引き剥がして楽しんでいるような、実に陰気な生命体なのだ。そうだ、あの女はきつと死神に違いない。血がねつとりと染み付いた大きな鎌を持ち、真っ黒なローブを羽織った、死神なのだ。

「ねえ、これとこれ、試着してみようと思うから感想聞かせて」

そついい残して、アバズレ女は試着室の中へと姿を消した。ちなみに、今現在のアバズレ女の服装は、足を少し露出させた短めのジ

インズと、なんかふわふわした感じの白いシャツである。いつもズボンを履いているのだが、先ほど試着室へと持って入ったのはどう見てもプリーツスカートとワンピースであった。あの女にスカートが似合うとは、到底思えない。

「覗いちゃダメだからね」

「眼が腐っちまう」

「サイアクね、あんた」

なんだこの被害妄想。俺がお前の着替えに興味があるはずないだろう。まず、その中途半端な胸のサイズをどうにかしろ、といってやりたい。いや、仮に胸が大きかったとしても俺は喜ばないぞ。沙織だって胸の大きさは並サイズだ。大きければ良いってものでもないし、小さければ良いってものでもない。結局のところ、胸の大小ではないのだ。誰の胸なのかが重要なのだ。沙織の胸ならメロンサイズだろうが、まな板サイズだろうが、俺は万々歳だ。逆にアバズレ女の胸が、スイカサイズだろうが、荒れ果てた砂漠サイズだろうが、俺にはまったく興味が無いし見たくもないのだ。覗いちゃダメだからね、とか女らしいことといわれると、むしろ逆に腹が立って仕方がない。壁を殴りたい。

しばらくして、カーテンが開いた。中に立っていたのは、短めのプリーツスカートを履いたアバズレ女であった。

「どうよ、これ？」

「もじもじすんの止めてくれ」

「はっ？　してないし」

どうよこれ？　とかいわれても、正直困るのだが。この女、昔からやけに身体のバランスが良かった。長い足がすらりと伸びていて、その辺の下手なファッション誌のモデルよりかは普通に上だろう。かといって、素直に似合つてるとかいうのはかなり癪だ。負けた気になる。それに、許容できない明らかな欠点もあるのだ。

裸足なのだ。

靴との関係で靴下を履いていないのだ、この女。これは許しがたいことだ。今朝方、沙織が証明してくれたように、短いスカートにはニーソックスなのだ。ハイソックスでは、足全体の露出が多すぎて、太もものありがたみが感じられなくなってしまうし、裸足など論外である。だから、この女の格好は論外なのだ。組み合わせ的に

「なんかさつきから下ばっか見てない？　どうなのよ、早く答えてよ」

「そうだな。ありかなしかでいったら、なしだな」

「……くっ」

ふんと鼻を鳴らして、アバズレ女は再びカーテンを閉めた。お怒りのようだ。

「絶対、覗いちゃダメだからね！」

「くどいな、お前……」

自身過剰も大概にして欲しいものだ。そりゃあ、胸が中ぐらいであることを除けばスタイルはそこそこ良いかもしれないし、顔だって黙ってれば人生一度ぐらいはモテ期が到来する程度の可愛さはあるだろう。だがしかし、お前のそのサイアクな性格は他の全てのプラス要素を合わせてもカバーし切れないくらい酷いありさまであり、全体的に見ればお前はゴミ粒のような存在なのだ。そんな女の着替えを覗いて喜ぶ男など、ごく一部の变态どM人間ぐらいであろう。俺はそのごく一部には該当しない、健全な男子である。寝言は寝てからいえと。

間もなくして、カーテンの扉がゆっくりと開いていった。中にいる女は、両腕が露出した夏服用のワンピースを着ていて、少し恥ずかしそうにこちらへ視線を送っていた。

「なんか……これはちょっと、なかったかなあ、とか思ってるんだけど」

「似合ってるぞ」

「え、ほんとに!？」

「あー……」

やってしまった。普通に感想を述べてしまった。驚くぐらい自然に言葉が出てきてしまった。どうしたものか。日頃、スカートを履かないこの女が思いのほか女らしく見えてしまった。恐ろしいワンピース効果である。もっと酷いことをいわないといけない場面で、似合ってるぞ、などと面白みの欠片もないセリフを吐いてしまった。しくじった。これはミスである。想像以上に攻撃力が高かったようだ、アバズレ女のくせに。どうしたものか。このままでは俺の体裁

が危ない。きっと今の俺のセリフを沙織が聞いたら『お兄ちゃんって私以外の女にそんなこというんだ、ふうーん』てな感じで嫉妬の炎をばーばーに燃やされること請け合いである。どうする、直ちに先ほどの発言をなんとかせねばならんだろう、俺。

「し……四捨五入すれば似合ってると思うぞ……」

「はあ？」

「五割以上だから似合ってるってことだ」

「なんか、嬉しくないんだけど」

良かった。嬉しくないようだ、それは本当に良かった。喜ばせるつもりなど毛頭ない。むしろ、絶望のどん底に落としてやりたいくらいだ。よし、こうなったら、もう一撃を食らわせてやろうか。置みかけるように、嫌な気分にさせてやる。

「お前に似合いそうな服を思いついたぞ」

「え、なに、どんなの？」

「その格好をすれば、間違いなくお前のその魅力を千パーセント引き出すことが出来ると思うぞ。もう、街中を歩けば男はみなお前に釘付けになるだろうな」

「べ、別に、そんな男を虜にするだなんて、興味ないんだけど。でも、あんたが似合うつていうんなら、着てあげてもいいわよ。一回だけなら」

「よし、待ってろ」

虜にするなんて一言もいってないのだが。しかし、釘付けになる

ことは間違いない。嬉しそうな顔しやがって、見てろよアバズレ女。お前のその高慢ちきな態度に一発がつんとお灸を据えてやる。

俺は店内をうろつき始め、いかにもなにかを探してますという風な素振りを繰り返した。定員に質問してみたり、飾ってある服を実際に手にとって揺らしてみたり、それなりに時間をかけてゆつくりと、店内を回った。試着室の前からアバズレ女がこつちを見ている。もう少し、焦らしてやろう。

その後、数分かけて、俺は服という服を選び抜いた。もちろん選ぶつもりはないのだが。そして、そうとう時間が経ったことを確認してから、試着室の前へと戻っていった。

「どうしたのよ、こんなに長く待たせて」

「ああ、探してんだ」

「で、どうだったの？ 私に似合う服ってのは」

「それが、どうやら置いてないらしいぞ。お前にすげえ似合う服。惜しかったなー、あれ着ればお前はもう神クラスだったのに」

「そっ、なんだ。じゃあ……仕方ないよね」

アバズレ女が残念そうな顔をして俯く。思いのほか、ショックだったようだ。俺は笑いを堪えるのに必至である。

「その……私にすごく似合う服って、どんなだったの？ 今度、一応探してみようかなって思うんだけど」

「黒い……」

「黒い？」

「黒いローブに血のついた大鎌持てば、お前は立派な死神になれるぶふあつ——」

いい終えるより早く、俺の顔面に熱い拳が叩き込まれた。みしりと危ない音が脳髓で鳴ったかと思うと、俺の身体はダイナミックに後方へ吹っ飛ばされ、そこで一瞬、記憶が途切れた。

「いつてえ」

激烈な痛みが顔中を駆け巡った。積み上げられたダンボール箱の中へ飛び込んで行ったらしく、辺りにそれが散乱している。店員が急いでこちらに走ってきた。

「お前、加減てものを知らんのか」

「ばか……」

「は？ なんだって？」

「ばっかじゃないの！ 死んじゃえ、ばーか！」

大きくそう叫んで、アバズレ女はそのまま走り去ってしまった。あいつが振り返ったとき、目の辺りから光るなにかがこぼれ落ちたのが見えた。そして、俺の鼻の中から、ぬるつとした液体が流れ出てくるのが分かった。

「お客様、大丈夫でしょうか？」

「問題ありません」

もの凄く迷惑そうな顔をしている店員に、容態を訊かれた。ほんとは半端なく痛いのだが、とりあえず大丈夫と答えておいた。今からどうしようか、家に帰ろうか。ようやく、あの女から開放されたことだし。しかし、ちとやり過ぎてしまったかもしれん。いや、でもあれぐらいは……。

「あの……お客様」

「ああ、すいません。今出て行きます。失礼しました」

立ち去ろうとしたとき、店員に呼び止められた。

「お連れ様が着て行かれた服の代金をお願いします」

「え、まじで。いくらなの」

「二万三千円になります」

「ふおおおおお!!」

第五話 結局こうなるわけで……

雨がぽつぽつ降っていた。

天気予報通りの雨だ。

本来なら、沙織と二人で一つの傘を使って相合傘でもしている頃だったろう。俺は傘も差さずに、右手にはあの女の服やら靴やら、プラモデルやらが入ったビニール袋を引っさげて、ただ街道をひた走っていた。

見つかるわけがない。都会はこんなにも広いのだ。

いつそ、手に持っているビニール袋をその辺のゴミ箱に投げ捨てて、帰宅しようかとも思った。ばか高い服まで買わされているのだ、それくらいしてもまだあの女に残金を請求できるくらいだ。さっきから鼻血が止まる気配がない。恐らく、鼻の中の骨的ななにかがぐちゃってしまったのかもしれない。今すぐ病院に行きたい。

俺は鼻をすすりながら、雨に打たれながらもあの女を探した。もうすぐ日が暮れそうだ。朝来た時よりも、随分人が少なくなっている。それでも、あの女を見つけるのは容易ではなかった。

しばらく経つと、走り疲れて俺は立ち止まった。両膝に腕を突き立てて、肩で息をする。雨が本降りとなってきて、顎から水が滴り落ちた。服がびしょびしょに濡れて少し重かった。

「サイアクだ」

俺は一人ごちた。もう無茶苦茶だ、せっかくの沙織とのデートがぶち壊しである。損害賠償を請求したい、あの女に。

ふと顔を上げると前方に人が立っていた。俺はそいつを見て、言葉を失う。

ピンクで装飾された悪趣味な傘を差し、赤と白の派手な衣装を身にまとった――ピエロがそこにいた。今朝方のピエロである。

そいつは俺の正面にまでゆっくりと歩み寄ってきて、赤でべとり塗られた大きな唇を開いて、こう告げた。

「青春を謳歌したまえ、少年」

「……は？」

左手で真横を指差し、ピエロが続ける。

「探し人は向こう三百メートル先の公園のベンチにいる。早く行ってやりたまえ」

なんだこのピエロ。いや、行ったほうがいいのか？ というかなんで知ってんの？ 誰だこいつ。俺は若干混乱した。鼻血はまだ止まらない。落ち着いて、状況を整理してみようと思う。今、俺が取るべき選択肢は三つだ。

一つ、素直に従って公園へ行く。

二つ、無視して別の場所を探す。

三つ、ピエロを殴り飛ばす。

二つ目、別の場所を探したとてこれだけ広いのだ、見つかる保障はない。三つ目、仮にピエロを殴ってもなにも解決はしない。それならば、公園へ行ってみればもしかや……。

「なんか知らないが、とりあえずサンキューピエロ」

「ピエロではない。私は、パンダだ！」

俺は、パンダが指差す方へと駆け出していた。

公園のベンチにそいつは力なく座っていた。雨に打たれながら。

俺は声をかけるでもなく、そいつの傍まで近づいて行き、隣に腰を下ろした。

「なにしに来たのよ」

「別に」

「一人で帰ればいいじゃない」

「荷物」

いって俺は、手に提げていた白い袋を女に差し出した。中にはプラモデルと服と靴がぎっしり詰め込まれていて、バスケットボール並にばんぱんに膨れ上がっていた。

「濡れないように工夫してやったんだぞ」

「律儀に持つてきちゃって。捨てれば良かったのに」
「そんな酷いことはしねえよ俺は」

本当は捨てようか迷ったんだが。

「あんたいつだってそう。沙織、沙織って妹の名前ばっか呼んで、私は邪魔者扱いでさ」

この女、自覚はあったようだ。

「私のことは一度も名前で呼ばうとしないし、適当な対応ばかりしてくるし。服だって、まともに見てくれないし」

「いやいや、その服は似合ってるっていっただろ」

「四捨五入したらでしょ」

そんなに気に食わないのか、四捨五入が。そりゃあ、確かに死神の格好したら云々は、ちょっといい過ぎたような気がしないでもないが、まさか四捨五入を根に持つていたのか、この女は。どこで食らいついてくるか分かりやしねえ。ていうか、さっきからこの女…
…。

「泣いてるのか、お前？」

「雨が降ってんのよ」

「そうか」

「私のこと嫌いなら置いて帰ればいいじゃない。いつもいつも追いかけて来て……」

そこまでいって、女は悔しそうに唇をかみ締める。この女が俺を殴り飛ばして走り去るのは、今日が初めてのことでなかった。十回や二十回ではない、よくあることなのだ。その度に、俺がこうしてこいつを迎えにやってくる。

ある意味、段取りである。

自分でもよく分らない。この女が邪魔なのは確かだが、毎度、不思議と追いかけて来てしまうのだ。殴り飛ばされてもなお、追いかけて行くななんて俺はもしかしたらドMなのかも知れない。変態である。あるいは、この女が泣いているから、それが気になって来てしまうのかも知れない……。

「ほら、ずっとここにいたら風邪引いちまうだろ。帰るぞ」

「……一人で帰ればいいじゃない」

「女を残して帰れるわけないだろ」

それを聞いて、女がゆっくり立ち上がった。これも段取りである。迎えに来れば必ずといっていいほどに愚図るこの女に、魔法の言葉をかけてやるのだ。

オンナヲノコシテカエルワケナイダロ。

便利な言葉である。棒読みである。そして、俺たちはいつも通り帰途につくのだ。

「いたっ」

「なんだ？」

「足、怪我したみたい」

裸足で走ってきたのだ。なにか変なものでも踏んだのだろうか。

「はぁ……仕方ねえな」

俺は女をおぶって、雨降る街道を歩き始めた。鼻血はいつの間にか止まっていた。ちなみに、足を怪我したというくだりは段取りではない。アクシデントというやつだ。

ふと、思った。

なぜだろうか。妹とデートに来たはずなのだ。しかし、どうして俺は幼馴染みをおぶって帰宅しているのだろうか。

謎である。

第六話 少女、拾いました

人が一生のうちに交通事故に遭う確率は五十パーセントほどらしい。二人に一人、思いのほか高いようだ。一方で、生まれてくる赤ん坊が男の子である確率は五十一パーセントほどで、女の子より少し多いらしい。不思議である。それならば、学校からの下校途中に道端で幼い女の子が捨て猫のように投棄されている確率はとうだろうか。

俺は住宅街の路上の真ん中で凍り付いていた。ズボンのベルトを掴まれて、前に踏み出せずにいた。一体なぜこんなところに、そんなものが落ちているのか、俺の脳みそでは到底理解することが出来なかった。それは俺の後ろにぴたりと張り付いてきて離れようとはしない。右で結んだ短めのサイドポニーがちょこちょこ揺れている。少し視線を落として顔を覗き込んでみると、大きな黒い瞳が、今にも俺を吸い込んでしまいそうなほどの輝きを放っていた。じっと黙ってこちらの様子を伺っている。それは、白いワンピースを着た一人の少女だった。

唐突に——その少女の口から、思いがけない言葉が飛び出した。

「お兄ちゃん、私を拾ってください」

確率では説明できない、人はそれを奇跡と呼ぶらしい。

俺はさっきまで少女が入っていた小さなダンボール箱に目を向け

た。みかん箱ぐらいの大きさで、その少女はそこに両足を突っ込んで、突っ立っていた。入っていたという表現が果たして適切なのかは疑問が残るところである。ダンボール箱の表面には一枚の張り紙が付いている。赤いマーカーで『落し物』と書かれていた。

まさかこの日本で捨て猫ならぬ捨て幼女がいるなんて、そんな非日常、あるはずがない。これは俺の直感だが、罠である確率が非常に高い。巧妙に仕組まれた、SSランクのトラップに相違ない。もし仮に俺がこの少女を振り切ろうとして走り出そうものなら、俺の速さに着いて来れずに、少女は豪快に前のめりになつてぶつ倒れるだろう。そしてその瞬間、十メートル先にある電柱の影から、あるいは二十メートル後方にある曲がり角から、もしくは三十メートル先にあるマンホールの中から、黒スーツやら白スーツやらを着た人たちがのっそりと姿を現すのだ。いかつい格好をしたおじさんたちが「おい、あんちゃん。てめえうちのボスの孫娘さんになんてえことしてくれんだゴルア。払うもん払ってけよゴルア」と強引に絡んできて、そして俺は素っ裸にされてドラム缶に詰め込まれて海に投げ捨てられてしまふに違いない。まだ死にたくはない。

それならば、走り去らずに少女の手をベルトから引き離すため腕をそつと払いのけるのはどうだろう。そうすればその瞬間、十メートル先にある電柱の影から、あるいは二十メートル後方にある曲がり角から、もしくは三十メートル先にあるマンホールの中から、黒スーツやら白スーツやらを着た人たちがのっそりと姿を現すだろう。いかつい格好をしたおじさんたちが「おい、あんちゃん。てめえうちのボスの孫娘さんになんてえことしてくれんだゴルア。払うもん払ってけよゴルア」と強引に絡んできて、そして俺は素っ裸にされてドラム缶に詰め込まれて海に投げ捨てられてしまふに違いない。同じ展開である。

こうなったらいつそ、少女に一切危害を加えずに何事もなかったかのように歩いていくのはどうだろう。少女がベルトを掴んでようが構うまい。しかしおそらく、数メートルほど進んだところで、十メートル先にある電柱の影から、あるいは二十メートル後方にある曲がり角から、もしくは三十メートル先にあるマンホールの中から、黒スーツやら白スーツやらを着た人たちがのっそりと姿を現すことになるだろう。いかつい格好をしたおじさんたちが「おい、あんちゃん。てめえうちのボスの孫娘さんを誘拐しようってんじゃないだろうなゴルア。払うもん払ってけよゴルア」と強引に絡んできて、そして俺は素っ裸にされてドラム缶に詰め込まれて海に投げ捨てられてしまふに違いない。八方塞がりである。

世界は混沌とした不条理で出来ている。助かる選択肢は動かないこと以外に存在しない。ただ寡黙に勝機を待つしかないのだ。ゆえに俺の身体は氷のように固まっていた。

「なにしてんの？」

後ろから聞き慣れた女の声がした。首を回してみると、いつも通りの女がそこにいた。

「まーた、お前は帰れとかいうんでしょ。でも帰れないから。私、今からあんたの家向かうとこだし、沙織ちゃんにクッキーの作り方を教えに行くんだから」

安定の遭遇率、道式結奈であった。水色のロングTシャツにネッ

クレス、濃い目のジーンズといつもながらの服装で、右手にはスーパーに買出しにでも行って来たのか、大きなビニール袋を提げていた。相変わらず腰の曲線美だけは認めざる終えない。

結奈は視線を少し落として、首を傾げた。

「ところであんた、この子誰？」

それはこっちが知りたい。この少女は一体誰なんだ。

「あんたまさか……」

結奈の顔が次第に青ざめていって、

「妹だけじゃ飽き足らず、そっち系に目覚めて誘拐しようってんじや——」

「んなわきゃねーだろ。いい所に来たな、一つ頼みを聞いてくれ」

「頼み？ なによ」

「この少女を連れて三メートル歩いてくれるだけでいい」

「三メートル？ なんで」

「いいから、歩いてくれ」

そうすれば俺が助かるからだ。そしてお前は黒ずくめの男たちに襲われて海の藻屑となる。

「まあ、とりあえずあんたの近くにいるよりは安心だもんね」

いつて結奈は少女の手を引き、ゆつくりと歩き始めた。ズボンのベルトから少女の右手が、するりと抜け落ちた。晴れて俺は解放された。

「ねえ、お嬢ちゃんはどこから来たの」
「寒いところ」

一メートル前進。尊い犠牲となってくれてありがとう。鼻の奥が今でも痛みます。

「そうなんだあ。じゃあ、名前はなんていうのかな」
「ささら。平内ささらっていうの」

二メートル前進。ささらちゃん、それがお前を地獄に叩き込む少女の名前だ。

「よし、じゃあささらちゃん。お姉ちゃんと一緒にご両親探そうか」

遂に三メートル。そこまで進んで、前方に見える電柱の影から、マンホールの下から、そして後方の曲がり角から、頬に傷を負った

スーツ姿のハゲ面の男たちが一斉に飛び出して――。

来なかった。

「あんたも早く来なさいよ、置いてくわよ」

「え？ ああ、そうか。今行くわ」

罨ではなかったっぽい。勘違いっぽい。なんだよ、焦らせやがって。

「お姉ちゃん。私ね、あのお兄ちゃんと一緒に行くところだったの」

「そうなんだあ。あのお兄ちゃんと、どこに行くところだったのかな？」

「ラブホテル」

「ラブッ……」

途端に結奈は少女を連れて駆け出した。

「お巡りさん！ ここに変態が！ 変態がいます！」

「待て待て待てーい！ そんなこと一言も言ってねえぞ俺は！」

なぜか引き離されていく俺であった。

一応迷子という名目でさらちゃんを交番に届けた後、ようやく俺は一人帰途につくことが出来た。寂しそうに手を振っていたさらちゃんの姿が思い起こされる。両親は迎えに来てくれるのだろうか。なんとも世知辛い世の中である。

「本当に親に捨てられたのかな、あの子」

「そんなわけあるかジーンズ。ていうかお前、なんで俺の隣を歩いてんだ」

「私もあんたの家向かうからじゃん」

「ならもう少し離れて歩けジーンズ。これじゃ一緒に歩いているみたいになるだろ」

「私、ジーンズって名前じゃないんだけど。別にいいじゃん、向かう先は同じなんだし」

とんでもないことを抜かしやがるこの女。もしこんなところを沙織に見つかりでもしたら、どうやって弁解を試みればいいんだ俺は。ただでさえクラスが同じで疑いの眼差しを向けられているというのに――特に先日の上着の事件とか――これ以上いつと仲良くしていると思われるような現場を目撃したら、本当にもう沙織は俺に愛想をつかしてしまうかも知れないのだ。沙織の周囲に男を置かないということは、それすなわち俺の周囲に女を置かないということである。恋はシューティングゲーム、愛はシンメトリーなのだ。完全に調和のとれた俺と沙織、二人だけの世界を実現するには周囲の害虫を徹底的に駆除し尽くして、這いよる隙を与えてはいけないのだ。ゆえに害虫寄生虫であるこのジーンズ女を俺の周囲から排除することは当然の義務だといえる。

俺の足の速さは既に陸上選手を凌駕していた。

「ちょっと、なんで走るのよ！」

「うるさい！ 着いてくんな」

「別に急いでるわけじゃないんでしょ！」

「うおおおおおっ！ 誰がお前なんかと一緒に帰ってやるものか！」

四百メートルほど進んで、俺は電柱にもたれかかった。背後にはまだジーンズ女がいた。

「あーもう駄目だ。しんどい」

「相変わらず体力ないわね、あんたそれでも男？」

「うるせえ！ お前が異常なんだよ！」

やはり、この女を物理的に引き離すことは不可能だった。昔から運動能力でこいつに勝ったためしがない。最後に徒競走で負けたのは中三の時のクラス対抗リレーだった。俺は一組でジーンズ女は二組。不運にもくじ引きで走る事になった俺と、自ら率先して走ることを決めたこの女とじゃ次元が違いすぎた。一番手は両クラスとも同じぐらいでバトンタッチをしたのに、二番手を走った俺とこの女との間には天文学的ともいえるほどの差が開いてしまった。沙織の前であれば恥をかったことは他にはない。ちゃんと手は打ってあったのに。レーンが隣同士だったため、出だしに右足を引っかけ躓かせてやろうと目論んでいたのに、あっさり足を跨れてしまった。すごく悔しかった。

仕方がないから物理的に引き離すことは諦めて、日頃は精神的に

距離を取るように心がけている。沙織の前でこいつとは仲良くしない。汚い言葉で罵倒をして、犬猿の仲であることを沙織にアピールするのだ。そうすれば沙織も俺が他の女に靡いてなんかいないことを分かってくれる。きつと分かってくれるのだ。

間もなくして、自宅の前に到達した。

「遅れて入って来いよ、ジーンズ」

「あんたがね」

迷わず扉を開けたのは、ジーンズ女のほうだった。レディーファーストほどふざけた慣習はない。これじゃ俺が遅れて入ることになるだろ。

腹が立ったので最低三十分は遅れて入ることに決めた。沙織は既に帰宅しているはずだ、近しい時刻に二人が家の中に入っていけば間違いなく誤解を生むことになる。まったく、めんどくさいことになったもんだ。

玄関の前で胡坐をかいて座り込む。己の家の前で、なぜこんなアホなことをせにやなんのだ。大仏様か俺は。

するとすぐに、扉の向こう側から驚いたような声が聞こえてきた。

「どうして、ささらちゃんがここにいるの!？」

ジーンズ女がいった。間違いなく、そうだった。俺は首を傾げドアの前で一人呟いた。

「いるわけないだろ」

しかし、続けて耳に届いたのは幼い少女の声だった。ドアを隔て、小声なので何をいつているのか聞き取れないが、家の中にいるのは間違いなく沙織やジーンズ女とは別の人物であることが分かった。

俺はドアを少しだけ開けて、見つからないように中を覗いてみた。

ジーンズ女の背中が飛び込んできた。その女の肩越しに、小さな少女をおぶって立っている沙織の姿が見えた。幼い少女は短めのサイドポニーで、簡素な白いワンピースを着ている。沙織の背中で、沙織の長い黒髪を両手で驚づかみにしては、振り回して楽しそうにはしゃいでいた。どう見ても、さっき交番に届けた幼女であった。

「結奈お姉ちゃんこの子知ってるんだ」

「知ってるも何も、さっき会ったばかりよ。なんでこの家にいるの？ え？ でも、どうやってここに来たの、走って来たのに？」

混乱を隠せない様子でジーンズ女が訊ねる。沙織が応じた。

「なんかね、この子親戚の子らしくて、当分この家で預かることにしたんだって。お母さんがいつてた」

「へえー、でもあれ？ おかしくない？ どうやって交番からここに……」

「交番？」

訝しげに訊ね返す沙織。後ろの少女に髪を好き放題いじられて、メデューサみたいになっていた。一方で後ろの少女は、沙織の髪で遊びながら「やまんば！ やまんば！」と繰り返していた。

「お兄ちゃん、お帰り。早く入って来なよ」

あっさり見つかってしまった。

「沙織、その少女はどうやってここに来たんだ」

「どうやってって、お母さんが連れてきたんだよ」

それを聞いて、俺とジーンズ女は顔を見合わせた。分からないといった表情で視線を送ってくるが、俺だって分からない。

「ねえ、結奈お姉ちゃん、もう準備出来てるからクッキー作り教えてよ」

「え？ ああ、そうね。材料は買ってきたから、始めましょうか沙織ちゃん」

沙織は身をかがめて背中に乗っている女の子を下ろすと、ジーンズ女の手を引き、そのまま奥にあるリビングへと引っ張っていった。そうして玄関には俺とサイドポニーの女の子だけが取り残された。いや、取り残されたというより自らの意思でここに残ったように思われた。目の前の女の子は無表情でこちらに視線を送っ

てくる。何もしゃべろうとはしない。少し微妙な雰囲気になったので、とりあえず何かしら適当に質問を試みた。

「ささらちゃんは、俺の親戚だったんだね」

「ロリコン」

「え？」

「少女に対する極度の性的嗜好者、突き詰めれば性的倒錯者、すなわちパラフィリア、お兄さんのこと」

「待て待て、俺はロリコンじゃない。沙織一筋だ」

少女に向けて手を伸ばしたら、鋭く払い落とされた。眉一つ動かさず、少女が続ける。

「触るなペドフィリア」

「ペドツ……！？」

「いいか、よく聞けペドフィリア。私が右といえば右を向き、左といえば左を向け。低い姿勢を心がけ私を見下ろすな、両手のひらを仰向けに土下座をして忠誠を誓え。返事はイエス、ゴッド以外認めない。分かったか？」

ドスの利いた声に俺は身じろぎすら取れずにいた。まるで悪霊が取り憑いたみたいに豹変する少女。つぶらな瞳からは何を考えているのか読み取れない。どこからどこまでが本気なのかも分からない。今すぐにでも陰陽師を連れて来ようかとも思った。

上手く言葉にならない言葉をなんとか搾り出そうとした。

「ささらちゃん、王様ごっこが好きなのかな？　なんてね？」

我ながら渾身の切り返しだと思えた。

しかし、次の瞬間――。

少女のワンピースが肩からずりりと床に落ちた。目前にはパンツ一枚の幼女が立っていた。

俺が言葉を失っている間に、少女はゆっくりと反転して、俺に背を向ける。背中の肌は白く、お尻にはライオンが描かれていた。

「お姉ちゃん！　お姉ちゃん！　お姉ちゃん！」

廊下の奥から沙織が声を上げ、こちらに向かってるのが分かった。

そして俺は全てを悟った。

これは超まずい。ウルトラ超まずい。パンツ一枚の少女と俺。そこにはもはや説明なんて必要ない、崩壊だけが口を開けて待っている状態だった。

「でえええええええやああああ！！！」

社会的な死を覚悟した俺に怖いものなどなかった。関取も真つ青のつっぱりで、廊下を進撃する。奥から顔を出した沙織がびっくりして飛び上がった。

「うわっ！ どうしたのお兄ちゃん！」

「相撲は国技だ！」

「知ってるよ。どいてくれないと、前に進めないよ」

「大丈夫だ、キッチンに戻れ沙織！」

「でも、呼ばれてるし」

「大丈夫だ俺がなんとか食い止める。早くクッキーを焼いたらいい」

先へ進ませるわけにはいかない。俺は虚空に向けて全力で張り手を繰り返した。どすこいどすこい、と気が狂ったかのように叫び続けた。

「お姉ちゃんもう大丈夫だよ」

振り向くと少女が立っていた。服をちゃんと着ていた。

「そう、じゃあ戻るね……」

「うん、私もクッキー作るの手伝うね」

危ない人を見るような目つきで俺に視線を送っていた沙織だったが、やがて身を翻してリビングへと戻っていった。それを確認し終えると、俺は膝から崩れ落ちた。体力ゼロで立っている事もしんどかった。二百発ぐらいは張り手を繰り返していた。

息も絶え絶えに、ぜえぜえはあはあいつている俺の耳元で、そつと少女が囁いてきた。

「返事はイエス、ゴッド以外認めないよ、お兄さん」

「……くっ」

「く？」

「イエス……ゴッド……」

「今日からよろしくね。お兄さん」

いい置いて、少女はリビングへと姿を消した。楽しそうにくすくす笑う声だけが、俺の耳に残り続けた。

ふと記憶を辿ってみた。少女のサイドポニーが右から左に変わっていることに、気が付いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2732w/>

妹は誰にも渡さん！

2011年11月24日15時55分発行